



愛しいものの死

眞鍋由比

『続・豚の死なない日』 『続・豚の死なない日』 白水社 1996

昨年の中学2年生に國森康弘『恋ちゃん はじめての看取り』を読み聞かせしました。恋ちゃんが大好きなおばあちゃんが死んだことをうけとめていく絵本でした。そのあとがきはこうあります。関東のある小学校では「人は死んだら生き返りますか」という質問に4割のこどもが「はい」「生き返ることもある」と答えました。

物語ではないから、人は死んだら生き返りません。あまりにも「死」が日常から遠ざかっている。

『豚の死なない日』はほとんど自伝といっている小説です。ロバート・ペックは貧しいシェーカー教の12歳の少年。学校をサボって帰る途中に見かけた牛の出産を手伝う場面から始まります。母牛の熱い息がからまってきそうな迫力のシーンです。ひもが見つからないからすかさずズボンを脱いでその両端を子牛の足と木の幹にズボンを結びつけて、母牛からでてくるように仕向けます。苦しそうに暴れている母牛ののどになにか詰まっているのが見える。取り除いてやらなくちゃ、と牛の口に入れたけど、牛に噛み付かれてそのまま体ごと振り回されあまりの痛さに意識不明になってしまう。そして気がついたとき、周りの大人にりっぱに子牛を生まれさせたとほめられるんだけど、腕がぐちゃぐちゃで折れているのではないかと心配されます。そして、何と糸で縫われるんです、お母さんに。お母さんはお医者さんなんかじゃありません。シェーカー教徒はよほどのことがない限り医者にもかからずに、つつましい暮らしをしています。「フリル」といって「なくてもよいもの」は生活に不要だと、ぜいたくを厳しく戒めて生活している人たちです。子牛の誕生を手伝ってくれたから、と母牛の持ち主タナーさんはコブタを1頭、ロバートにくれました。なんてきれいなコブタ。どんな生き物もかなわない。頭の先からしっぽのさきまで真っ白。ちょっとだけピンクのところがあってそれがうっとりするほどかわいい。ロバートはいつもぜいたくと思われるものはあきらめなくてはならなかったので、ほんとうにほしくて自分のものになったのはこのピンキーが初めてでした。

かわいいピンキーのために小屋を作って、一緒に散歩して、ときには自分のご飯をあきらめてまで餌をやって…。市場に連れて行ったら「しつけのいいブター等賞」のブルーリボンをもらいました。

イタチに犬をけしかけると鶏を食べにくるイタチに犬が番犬として働くようになるから、と隣人のテリアを自分ちの鶏を食べたイタチをけしかけたシーン。ピンキーの種付けのシーン、そして誰よりも愛したピンキーとの残酷な別れ。美しくも華やかでもない、淡々と語るペックの物語は、生きていくうちにはいろいろな生き物の犠牲が、どうしようもなくあるのだと教えてくれます。

そしてタイトルの「豚の死なない日」。豚を殺すのがお父さんの仕事でした。つつましく、他人の牧場の豚を殺して生きる糧を得ていた人。文字が読めずに、銀行の支払い書の書名欄にも×印しか書けなかった男。強く静かで頼りがいがある隣人にも仕事仲間にも信頼されていたすばらしいお父さん。だからこそ息子には絶対に学校で教育を受けさせたかったお父さん。豚が死なないことはうれしかったけれど、誰よりも大切な人を失って、ロバートは13歳で大人になることを余儀なくされます。農場を守って、お母さんと伯母さんを守って生きなくてはならない。

誰だって生きていく限りいつか死ぬ。ロバートの素朴であたたかい性格とユーモアに救われながらも、生きることは決して楽じゃなく、周囲の「死」にもがき傷つきながら毎日を必死で生きていく彼を見たら、「死」を見ようともせず、ただ逃げているだけの人間のことばにどれほど説得力があるだろう、と考えてしまいました。